

情報モラル教育 白河市立表郷小学校

キーワード：「文房具」的活用、「じっくり」、「たっぷり」、教科での指導、幼小中・地域連携

I 研究について

1 情報モラル教育に関する学校の課題

1年次（令和3年度）は「トラブルにその都度向き合い、教育するチャンスとする」を合い言葉に、情報モラル教育を学校の重点に掲げ、道徳科と学級活動(2)の授業と子どもの姿から、情報モラル教育を推進した。多くの成果を見いだした一方で、課題が3点見えてきた。

国語科や算数科といった他の教科等での指導

保護者と共に情報モラル教育を進めていく体制とあり方

育てたい子どもの姿と「この学年・この時期だからこそ」を踏まえた全体計画・配当

2年次（令和4年度）は、前年度の研究の成果を生かしながら、研究テーマのもと、「教科等での指導」「保護者との連携」「全体計画の改善」の3点について研究を進めてきた。

3年次（令和5年度・今回）は、昨年度までの研究の成果だけでなく、そこから見いだされた課題の解決を図り、「文房具」的活用だからこそ、そこから「学びにかえる方法」、小学校だけでなく「地域全体への情報モラルの推進」の2点について研究を進めてきた。

2 実践概要

(1) 研究テーマ

ルールからマナー、そしてモラルへ
～表郷小学校「ならでは」「だからこそ」の情報モラル教育を考える～

(2) 3年間の見通し

1年次	実態把握を生かした授業構想と指導カリキュラムの作成 (タブレット導入時の困り感・家庭での実態からカリキュラムをつくる)
2年次	情報モラルを育む指導の日常化と家庭との連携 (教科タブレット活用場面での「小刻みな情報モラル指導」と家庭啓発)
3年次	子ども・家庭・地域・教員の思いを生かした『表郷小情報モラル』作成 (地域全体で情報モラル教育を考える機会づくり・共通実践)

(3) 研究内容・方法

A 教科等指導	①【校内授業研究会】道徳科・学級活動(2)の授業から学ぶ ②【ミニ実践・事後研】全担任教員による情報モラルに関わる指導
B 保護者連携	①【アンケート】アンケート結果と課題共有 ②【授業参観等】子どもと保護者が一緒に考える授業の実施 ③【教育講演会】保護者が情報モラル教育を学ぶ場の設定 ④【幼小中連携】小学校の授業参観を通し、幼小中学校での連携強化
C 計画改善	①【校内研修】よりよい情報モラル教育を考え改善する場の設定 ②【実践・改善・位置付】授業研・実践をきっかけに再考する場の設定

(4) 今年度の研修の実際

時 期	方法	実 施 内 容
4月19日	C-①	校内研修「情報モラル教育で大切にしたいこと」
6月12日	A-①	校内授業研修会①【道徳科】指導助言：静岡大学 塩田真吾 様
7月14日	A-②	授業参観における各学年代表者による情報モラルに関する授業公開
	B-②	
	B-③	
7月 中旬	C-①	校内研修「各教科等におけるタブレット活用場面と指導を考えよう」
9月 上旬	B-①	情報モラルに関わる実態アンケート実施（対象：児童・保護者）
9月 7日	A-①	校内授業研修会②【国語科】指導助言：静岡大学 塩田真吾 様
9月29日	C-①	校内研修「アンケート結果を踏まえた本校の情報モラル教育全体計画の見つめ直し」
12月8日	A-②	幼小中連携における情報モラル教育に関する授業公開
	B-④	
1月 上旬	C-②	校内研修「さらに情報モラル教育の指導を要する活用場面について」
2月 上旬	C-②	校内研修「今年度の成果と課題・全体計画の見つめ直し」

3 情報モラル教育で大切にしていること

(1) 次のステージへの授業「質的改善」の視点として

1人1台端末が導入され、本校の子どもたちも様々な教科等でタブレットを活用している。学校だけでなく家庭でもタブレットやスマートフォン等を使うことは、もはや子どもたちの日常の中で「当たり前」となっている。その中で、「ゲームのやり過ぎで宿題をやってない」「遅くまで起きていたから起きられなくて寝坊した」という場面に出合うことも少なくない。また、授業中のタブレット活用場面でも「いつの間にか脱線して違う画面を開いている」ということも未だにある。家庭で、親から「やり過ぎ」と言われた時に、親が感じる「やり過ぎ」と子どもが感じる「やり過ぎ」に差異があることがアンケートの結果からも分かる。そのような子どもたちの実態から次の3点に研究視点をしぼった。

1 内容（何を教えるか）

- ・これまでのように「トラブル事例」を紹介するだけでよいのか？

2 方法（どう教えるか）

- ・「知識を一方向的に教える」だけでよいのか？

3 時間（いつ教えるか）

- ・講演会や年間数回をみの授業だけでよいのか？

本校では、ICT教育では「情報を活用する力」、情報モラル教育では「リスクを判断し回避する力」といった「情報活用能力」を育むために、単なる「知識の教え込み」ではなく、活用しながら指導していくことが大切だと考える。GIGAスクール構想後、全員のタブレット活用を前提にし、子どもたち自身が「自分事」として考えられるような情報モラル教育について研究をしてきた。

(2) 「じっくり」「たっぷり」指導する

【じっくり指導】

- 道徳科・学級活動(2)・総合的な学習の時間といった「1単位時間」で指導する
(系統性を考えた配当だからこそ、計画的な指導を積み重ねることができる)
 - 実態から指導を考える
 - ・ 家庭でのタブレット等の活用状況を把握する
 - ・ 追加アンケートや聞き取り等で「過程・状況」をつかむ
 - 曖昧さに向き合う
 - ・ 「なぜそう思ったのか？」等を授業づくりに生かす
 - ・ 様々な見取りでつかみ「リアルな実態」を生かす
 - 特質を踏まえた授業づくりを行う

【たっぷり指導】

- 各教科でのタブレット活用場面で、何度も担任や専科・分科担当が指導する
(子どもの実態や活用での迷いを踏まえ「短時間で」「時には時間をかけて」指導を繰り返す)
 - 子どもの素直な「問いの連続」を大切に指導する
 - ・ 「どのように使うのかな？(活用スキル)」「どんなことを考えればよいのかな？(情報モラル)」「どのように気を付ければよいのかな？(リスク回避)」のつながりとバランス
 - 教科指導とのバランスを考える
 - ・ 「活用スキル+情報モラル+リスク回避スキル」「15分以内」で指導する

Ⅱ 研究の実際について

1 校内での実践～「じっくり」指導の実際～

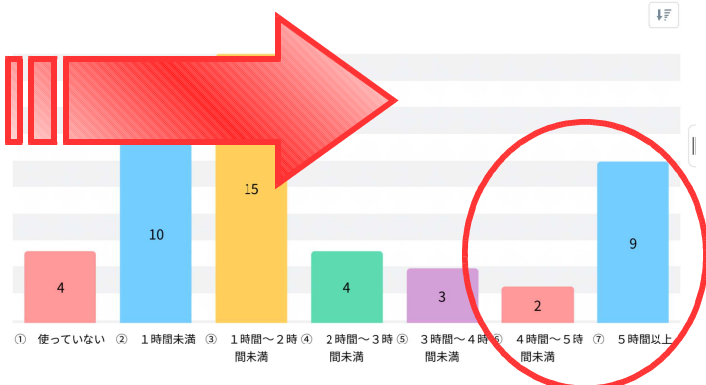
(1) 第1回校内授業研究会道徳科

学年： 4年	主題名： 度がすぎないために	教材名： 心の温度計（光文書院）
--------	----------------	------------------

① 子どもの実態 ～日々のエピソードとアンケートから～

子どもたちに『平日』1日どれぐらい勉強以外にインターネットを使うか』というアンケートを行った結果、半数以上が2時間未満だった。一方で、4時間以上使用している子がおよそ23%いるという結果が出た。「使いすぎ」の意識の違いが明らかとなった。

[3] あなたは、平日（土日祝を除いて）1日に勉強以外で、だいたい、どのくらいの時間、インターネットを使いますか？（スマートフォン、パソコン、タブレット、ゲーム機等を含む）



② 授業の実際

本時のねらい：	自分の生活や内面を振り返る活動を通して、度がすぎないために節度ある生活をしようとする心情を育む。
---------	--

【導入】

アンケートの結果を見て、自分なりの感想・意見を発表し合う。

【展開前半】

度がすぎないためにどうしたらよかったか考える。「人によってちがう」「～しすぎない」「時間を意識する」という意見が出た。

【展開後半】

度がすぎないためにどうしたらよいのか、これから自分なりにどうするかを考える。



自分の学級のアンケート結果を見て、どこに問題があるのかを考えた。自分事として考えることができるようにした。

「度がすぎる」という感覚が、自分と相手によってちがうと、トラブルの原因となることを知ることができた。タイムマネジメントの重要性も把握した。



〈子どもの姿〉

「度がすぎる」というのは、人によって感じ方がちがうんだね。



今まで親に「やりすぎ！」と言われていたけど、それは「度がすぎる」の考え方が違っていたからなんだと分かった。

③ 事後研究会・ご指導を通して見えてきたこと

- 「度がすぎる」は、人それぞれ考え方が違う。大切なのは自分で自分をコントロールすることである。
- 時間に対する自律の力とタイムマネジメントの力を育むことが大切である。
- 家庭と連携を図り、子どもと保護者の「度がすぎる」の違いを知る。

(2) 第2回校内授業研究会 国語科

学年： 6年	単元名： 筆者の考えを読み取り、これからの社会での生き方について自分の考えを広げよう	教材名： 「メディアと人間社会」「大切な人と深くつながるために」 (光村図書)
--------	--	---

① 子どもの実態 ～日々のエピソードとアンケートから～

日常生活の中で「メディアにどれくらい触れているか」「どんなことが問題なのか」のアンケートを行った。その結果からは、メディアの使いすぎ、メディアのデメリット、コミュニケーションについての理解と苦手意識などが、子どもたちにとって課題であるということが明らかになった。

アンケートから見えてきた課題

- ・ メディアの使いすぎ
- ・ メディアはよくないこともある（見るとき、発信するとき）
- ・ コミュニケーションについての理解と苦手意識

②授業の実際

本時のねらい： 2つの教材文の筆者の主張に対して、自分の考えをもち、友達との交流を通して、自分の考えを広げたり、深めたりすることができる。

【導入】

情報発信の経験について、何にどれくらい使っているかのアンケート結果をクイズ形式にして出題する。

【展開前半】

筆者の主張に対して、自分なりにまとめを考え、自らの課題に注目しながら整理する。

【展開後半】

筆者の主張に対して「メディアと人間社会」の筆者の主張に対する考えを交流する。



メディアとコミュニケーションの関係について、筆者の考えに触れ、これから自分はどうすべきかを考えるという課題につなげた。

自分の考えを事前にまとめていたが、アンケートの結果を見て加除修正を加えた。タブレットを「文房具的に」活用することで、加除修正が可能となった。ノートとタブレットのハイブリットな使い方が効果的であった。



〈子どもの姿〉

人と関わる時間の大切さが分かった。メディアに頼りすぎるのはよくない。



メディアには、いい情報もあるけれども、うそや間違った情報もある。それを自分で見極める力を付けていくことが必要だと思った。

③ 事後研究会・ご指導を通して見えてきたこと

- アンケートの結果から、互いの意識の「ズレ」をどう捉えるか、いかにそれを自分事として捉えられるのが重要となってくる。
- 意見がぶつかった経験をどう活かすか。具体的に場面をイメージすることがトラブル解決の糸口となる。経験が少ない子どもたちには、「場面強制想像法」を取り入れ、シチュエーションを考える機会が必要である。年間指導計画に位置付け、日常化を図る。

2 「たっぷり」指導の実際

(1) 授業参観での情報モラル授業の様子

各学年で発達段階に応じて、各教科の中で「情報モラル」について指導をした。道徳科や学級活動、社会科での活用法やルールやマナー、タイムマネジメントについて触れた。



(2) 中学校区幼小中連携事業における情報モラル授業参観の様子

中学校区の保・幼・中の先生方に授業参観していただき、連携を深めた。



3 情報モラル教育講演会の実施（講師：静岡大学教育学部 准教授 塩田 真吾 先生）

保護者を対象に実施した。これから必要となる力である「情報を上手に活用する力」と「情報のリスクに対応する力」をどう育てるかについて、家庭で指導するためのポイントを主に3点ご指導いただいた。

○ 家庭での指導のポイント①

- ・ 24時間（1日）の時間の使い方を意識させ、タイムマネジメントの力を育てる
→ 自律を促す「タイムマネジメント」の基礎を培う。
ア・やることを書き出す イ・「時間」を予想する ウ・やる順番を考える

○ 家庭での指導のポイント②

- ・ 「ズレ」を意識したスローガンの見直し
→ ルールの曖昧さこそが、議論のチャンスと捉える。スローガンとなっている部分を
見直して、ズレの少ないルールづくりをする。

○ 家庭での指導のポイント③

- ・ 「自分がトラブルを起こしてしまう状況」をイメージさせておく
→ 「ゲームは1日1時間」を守れないときや破ってしまうときは、どんなときか。ど
う工夫すれば守りやすくなるか。

Ⅲ 成果と課題について

【授業研究、校内研修を通して】

- これまでに、道徳科、特別活動を軸に授業研究を進めてきたが、今年度は各教科等で実施する活用型情報モラル教育にも取り組んだ。教科の中でどのように位置付けていくかという提案となり、どの教科のどの場面で指導していくかを具体的に考えることにつながった。
- 情報モラル教育は即効性はないからこそ、「じっくり」「たっぷり」の視点から、これからも年間を通じて指導を積み重ねる体制を作り上げることが重要だと分かった。今後、子どもたちが情報モラルを身につけていく上でも、「その場限りの指導」ではなく、「今後も持続し進化していくことのできる情報モラル」について指導していくことが必要である。

【保護者との連携・教育講演会の実施】

- 新型コロナの影響で昨年度は実現できなかった、塩田先生によるPTA教育講演会を実施することができた。今回は希望した保護者のみの参加であったが、具体的な体験活動や考える場面があり、「家庭での情報モラル」について考え、意識を高めるよい機会となった。
- 保護者も「聞いてみたい」と思える内容であること、全保護者対象とした子どもたちとのワークショップ形式にするなど、今後の在り方について検討していく必要がある。

【今後に向けて】

- ・ 児童がタブレットを「文房具」的に活用できるようになってきた。ノートを書く場面、タブレットを使用する場面というように、ハイブリットな活用が授業の中で取り入れられてきている。教師側にも「文房具」として、タブレットは「学びの手段」であることを意識した授業づくりに取り組み、どの教科のどの場面で活用していくかを見極める力が必要となる。
- ・ 3年間の研究のまとめとして「表郷情報モラル」についてまとめ、子どもたちから保護者や地域に発信していく予定である。